

増殖技術改良試験（ワカメ）

担当者 技師 高 橋 邦 夫

〃 青 山 禎 夫

I 目 的

前年に引き続きワカメ養殖技術全般に亘って特に収量の増大を図ることに重点をおいて検討を行なう。

II 調 査 内 容

- ① 調査場所 東郡蟹田町塩越
- ② 調査期間 昭和40年6月～41年3月

III 調査方法と結果

① 室内培養種苗の沖出適期と、海面培養種苗との比較

6月29日深浦産の成実葉で採苗、室内で培養したものを8月10日、9月15日、10月4日と3回に分けて沖出しし、11月27日観察した結果、発芽階級は8月3.0、9月0.5、10月3.5であつた。

これは室内培養種苗としては良い発芽ではなかつた。

その原因は、室内培養中に単細胞の微小藻類が繁殖し、配偶体、芽胞体を覆つて枯死したものもあつたことゝ、9月15日沖出しのものは時化のため9月2日から15日まで現地で洗桶に収容していた関係も多分に影響しているものと考えられる。沖出し種苗の発芽状況は海面培養種苗の比較的良好な発芽のものと同程度であつた。

② 海面培養適層

1m間隔に小枠7個を連結して、6月21日深浦産の成実葉を用いて採苗、海面に垂下培養した結果、発芽階級3以上の発芽のよい深度は5m以深であつた。

これは奥内地先水深4m以深がよいのと略々同様の傾向であつた。

③ 養殖量増大方法の検討

養殖量を増す方法として、親繩を4層（深度0.1、0.6、1.3、2.3m）に張る方法と、網（2m×4m）に直接採苗する方法を試みた。

0.1m層の親繩の部分が切断、流失したので、充分な結果は得られなかつたが、4層揃つている下風呂、牛滝産の種苗を分散、養殖したものについてみると、1m当りの平均収量は0.1層、1.88Kg、0.6m層1.96Kg、1.3m層2.47Kg、2.3m層2.59Kgであつた。

例年上層ほど成長もよく収量も多かつたが、本年度は養殖適層がやゝ深い傾向に認められた。

収量の最大値を39年度の奥内に比べると、蟹田がかなり下回つている。又、ワカメ網の収量も最大が4.8Kgで、39年度奥内の5.8Kgに及ばない。これは地先の環境によるものか、或いは年変動によるものか明らかでない。

④ 種苗の分散方法による差

海面培養種苗を差込と巻付の2方法で分散し、その収量を比べると、差込1.71Kg/m、巻付2.73Kg/mで巻付が多かつた。

又、室内培養種苗についてみると、差込1.58Kg/mに対し巻付2.36Kg/mで同じく巻付が良好であつた。

⑤ 産地別種苗の収量比較

産地別の種苗を分散養殖してその収量を比較するに当つて種苗の発芽数が同一でなければ比較は困難であるが、こゝでは各産地別に巻付法により養殖（４層）した中で、成長・収量とも最もよい層のものを選んで比較してみると、次のとおりであつた。

県内産	階上	3.49	下風呂	3.47	牛滝	3.78
	三厩	3.08	深浦	2.12		
県外産	岩手	3.30	秋田	2.53	(単位 kg/m)	

深浦産は芽付が悪いため収量も悪く、又秋田産（室内培養種苗）は芽付が最良であつたにもかゝらず重量が少なかつたのは沖出しが甚しく遅れ、成長が悪かつたためである。

Ⅳ 今後の課題

ワカメの母藻が異なる各地の種苗を養殖した結果、収量面で大差がないのは養殖地先の環境に支配されるように考えられる。

しかし、生長の面からみると、産地の異なる種苗間で差が認められるようであるけれども、同一条件の種苗を揃えることが困難であるところから、なお継続して調査を行なわなければならない。ワカメは生売りする場合、早期収穫することが最も有利であることは云うまでもなく、このため生長率や品質（消費者の好む）の面についても更に検討する必要がある。